

神輿と寄合のパタン・ランゲージ

本橋 正成 (MOTOHASHI, Masanari)

+81-90-2303-2135

masanari at masanari.com

ABSTRACT

This paper describes a pattern language of MIKOSHI, which is a movable shrine, and YORIAI, which is a traditional Japanese meeting style, in today's local festivals in Tokyo. This paper also describes a pattern language of KUUKI, which is "atmosphere," when people communicate. These pattern languages are useful in community management, organization management, and software development.

1. はじめに

和を以て貴しと為す

十七条憲法

聖徳太子

20 世紀は、科学技術や工業化が西洋の文化に基づいて構築され発展し成果を上げてきた。特に情報技術やソフトウェア開発、製造などの分野でも経済的な成功を収めたと言えよう。しかしながら、それらの分野において細分化され全体が把握しにくくなり行き詰まりを感じるようになった。たとえば、品質や同調性に行き詰まりを感じていたソフトウェア開発手法において、東洋の文化や思想をルーツに持つ手法やプロセスにより成果を上げ一般的になった["West meets East," Coplien 他]。同様に、企業経営やマネジメント、社会、組織、建築、工学などの様々な分野においても同様の傾向があることを実感している。

日本は、古来から海外より多くのことを学んでいる。特に、鎖国していた江戸時代が終わって西洋の文化や思想を学び、徹底的に取り入れて経済的な成果を上げ、日本の経済は大きな成果を出した。しかしながら、バブル経済の崩壊や金融危機などの情勢から閉塞感を感じている。ここで、自ら育んだ「和」を改めて考えてもよいのではないだろうか。

本稿では、東京のある町で行われている神輿（みこし）と寄合（よりあい）の二つの行事に注目した。伝統的な文化でありながら、現代の社会情勢や他地域の文化を取り込みながら変化しつつ町民によって行われている。今後、現代社会の大きな変化からの影響を受け、これらの知識や知恵が消えていく危惧を感じている。

現在の神輿と寄合についての知識や知恵をパタン・ランゲージとして表現した。次に、組織経営、コミュニケーション、ソフトウェアなどいくつかの領域や分野にとって有用である可能性と方向性について考察を加えた。様々な分野や領域でのヒントを得る基礎的な研究を目指している。



図 1 目的

なお、私自身が生まれ育った東京のある町の祭礼について、私の参加経験と氏子総代へのインタビューから記述している。他の地域で行われている祭礼の経験はなく調査も行っていないことに注意いただきたい。

2. 構成

本稿の章立てとその概要を紹介する。

3. 「祭礼と神輿」：とある町会における祭礼と神輿の全体像と歴史的な経緯について説明する。
4. 「寄合」：準備段階である寄合や会議についての紹介を行い、二つの形態の寄合についてパタン・ランゲージを示す。さらに、寄合の中でコアをなす場の空気についてのパタン・ランゲージを示した。
5. 「担ぎ手」：神輿の担ぎ手についての現状と、募集についての解説とパタン・ランゲージを示す。
6. 「神輿」：神輿の準備から、町を練り歩く行為から終了までを時系列に解説し、そのパタン・ランゲージを示す。

7. 「考察」：最後に、本稿についての考察を加える。

重要と思われるパタンについては「★」マークをつけ、特に重要なパタンには二つの★マークをつけたので、参考にしてほしい。

3. 祭礼と神輿

神輿、御輿（みこし、しんよ）は、神道の祭の際に、神霊が御旅所などへ渡御するに当たって一時的に鎮まるとされる輿である。輿であるから通常は担ぎ上げて移動するものを指して言うが、それを台車に乗せて曳くものなど、別形態のものを指すこともある。祭りによっては、御輿の巡行に、山車（だし）、鉦（ほこ）、だんじり、屋台が随行する場合もある [Wikipedia, 神輿]。

地元の神社において、神様への感謝の意味を込めて毎年九月に祭礼が開催され、その祭礼の中で神輿と山車が出される。神輿も宮神輿と子供神輿の二種類がある。宮神輿は、荘厳で重たいもので、町会の大きさに比べて立派であるため神輿友好会の方々も魅力を感じて担ぎにくる。一方、子供神輿は軽く、地元の小学生が主に担ぐ。今回の記事において、宮神輿の話題を主として扱いたい。



私の住んでいる地域にある神社において、二つの町会に住んでいる人たちがそれぞれ氏子会（うじこかい）を形成している。それぞれの町会ごとに氏子総代（うじこそうだい）がおり、毎年の祭礼準備の寄合（よりあい、会議）において、その年の祭礼で神輿を出すかどうかを氏子総代が決定する。たとえば、東京でも有名な三社祭のように不祥事が発生すると神輿を出さない決定がなされる。地元の神社においても、事件が発生した翌年に宮神輿を出さない決定がなされたこともあった。氏子総代の決定に従って、役員がそれぞれ調整を行う。

宮神輿の決定がされると、役員によっていくつかの実務的な調整がなされる。たとえば、

- 氏子総代によって割り当てられた予算の中から具体的な用途と費用配分についての調整

- 担ぐコースの調整と警察などに道路占有の調整
- 何方所かの神輿友好会に日程を含む開催のお知らせと調整
- 神輿の担ぎ手たちにコースの途中で休憩を取り、その休憩場所でのお酒や食事が振る舞われる。休憩場所と担当、おもてなし内容の調整

などがあげられる。

20年ほど前（1990年）まで、誰でもその場にいれば神輿を自由に担ぐことができた。氏子以外の人々、たとえ組織的な暴力集団に属していても担ぐことができたが、背景にある暴力を示唆し威嚇しながら地元の氏子を押しのけて神輿を担ぐ行動をだんだんとするようになり、緊張が高まるようになった。ついに、20年前に地元の氏子との間に二年連続で傷害事件が発生してしまい、重傷者が出てしまった。その結果、五年程度の宮神輿を休止した。その際、神輿同好会や組織的な暴力集団に声をかけた地元の人は、町会の氏子会にいつらくなり、参加しなくなった。そのような歴史と経緯から、和気あいあいとした寄合や会議であったものから、また違った形に移行した。

20年前までは、神輿を担ぐ人（担ぎ手）は、神輿を担ぐために半纏（はんてん）を着る必要はなかった。事件が起こった翌年には半纏を着る約束をしたものの、そのルールさえも守られなかった。5年の休止を経て、神輿を担ぐ人（担ぎ手）は、必ず半纏を着る約束にした。神輿同好会の人は、その参加している神輿同好会の半纏を着るし、地元町会（氏子）はその半纏を着る。半纏によって、その担ぎ手が参加している団体がわかるようにした。

宮神輿の構造は地域や場所によって違うようだ。神輿は二本の縦棒が直接繋がっている親棒（おやぼう）がある。親棒の神輿より前の部分を「先棒（はなぼう）」と呼ぶ。この先棒は神輿の中心であり、この先棒を担ぐことはひとつのステータスとされている。宮神輿の場合、氏が先棒を優先的に担げるように依頼している。

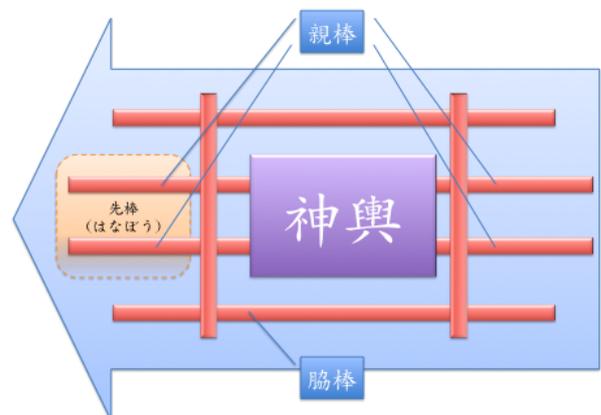


図2 神輿の担ぎ棒

今回のパタン・ランゲージにおいて、運営側である氏子総代と役員の見地からのパタン、またひとりの担ぎ手としてのパタンの二種類の視点が入っている。

4. 寄合

4.1 寄合についての解説

神輿の準備は、「寄合（よりあい）」と言われる会議に従って決定される。寄合は、日本における町や村の協議機関であり、文字通り「よりあう」ことである。その町や村では商店街店主が参加する「商店街の寄合」、氏子役員が参加する「祭礼の寄合」、若い年代の人たちが集まる「青年部の寄合」のように話題や参加者によって異なる寄合が開催される。

寄合開催の日時は、毎年の行事である祭礼であるため、ほぼ例年通りということになる。参加者も大きく変わることはまれであるため、そのスケジュール観はおおよそ暗黙の中で合意されている。時期が近づくと、たいてい氏子総代があらかじめ根回しを行った後に「もうそろそろ」の一言で、長年に構築された阿吽（あうん）の呼吸により寄合が開催に向かっていく。そこでの決定事項や役割も、宮神輿の開催是非などすでに暗黙の中で合意されていることが多い。

宮本常一著「忘れられた日本人」で記述されている寄合は、時間を区切られることなく何日にもわたって続けられている。しかし、私の町会の寄合は、会場の都合などから時間が区切られている。事前に根回しで決められていたり、数時間が経過すると「担当者で決めて、後で報告します」ということも多い。また、参加者の中かしびれを切らして結論を急ぐことがある。このように時間感覚は現代的な要素が取り入れられたと実感している。しかしながら、その根底にある合意形成へ至る道は共通点を見いだせる。

4.2 親密な形態の寄合

寄合は、いくつかの形態が観察されている。日本企業における会議もおおよそそのところで似ている。その共同体における実力者（神輿の場合は、二つの町会の氏子総代）によって根回しが事前に行われる。根回しは、寄合を開催する前に実力者によって合意形成をされる。その際の合意形成について記述する。

参加者が顔なじみで同じような考えや文脈を持つ場合の寄合について記述する。いわゆる議論 (discussion) のように正しい／間違っている、賛成／反対などのような対極の意見の優劣を決めるものではない。いくつかある意見を投票を行って、ひとつにしぼる選択的な会議形態とも異なっている。この形式の寄合が開催されると、寄合の議題、もしくは、どのような議題について話し合うかについても話される。たいていの場合、参加者がその問題に関する自分の意見を話していく。その際、反対意見も出されるし、議題から外れた意見も飛び出してくるが、その場の空気（雰囲気）でその意見についての取り扱いが決まってくる。その会議において、場の空気（全体的な雰囲気）が支配す

ることが多い。この形式の寄合において反対意見は歓迎されるが、その場の空気の範囲の中でということになる。時間の制限や興味の限界に近づいてくると終わりそうな空気の中「これでいきましょう」と意見が出されて、たいていの場合はその空気に従い、他の参加者も「それでいいや」で終わる。

寄合を仕切るモデレータやファシリテータの役割は、町会長のような役職者とは限らない。参加者の中から自発的に役割が生まれ、ダイナミックに変わっていく。たいていは年長のものがその役割を与えたりもする。

対話による根回しパタン ★

状況

- 顔なじみの人たちで同じような文脈や地位を持っているごく少数の人たちが集まっている。
- 何を議論することかも決まっていない場合もある。

問題

宮神輿を出す・出さないなどの祭礼に関して事前合意形成しておく。

フォース

- 数十年から数百年単位の歴史があるため短期的で直接的な方針ではなく、長期的に永続させる視点に基づいた方針が必要である。
- 伝統を大切にしているが、急激に変化している現代の潮流や文化などを取り込む必要がある。たとえば、団地やマンションのコミュニティ、コンビニエンス・ストアなどの影響や共同作業も検討される。
- 神事である祭礼や神輿の基本的な考えや、地域の人の性格や状況、過去の経緯を理解している必要がある。

解決

同じ文脈や立場を持つもの同士で徹底した対話を重ねることによって全体像の把握や方針の決定を行った。特に一部の参加者にとって快適ではない内容については、あらかじめ問答集を用意するなどの検討を行う。

否定的で非建設的な大人げない意見は、発言者が尊敬されなくなる可能性が高いため、基本的に回避する。ただ、そのような発言があった場合でも、その発言者の性格や状況を知っているため、周りの人は許容することが多い。

信頼された関係性が既に構築され、未来にわたって信頼関係を維持するために何らかの納得できる合意が得られるまで譲歩や止揚を含めて対話が続けられる。

結果

当事者（氏子総代）同士の認識の強化や共有がなされ全体方針が決定される。ただし、この決定された方針は、全員の意見を吸収したものではなく偏っている可能性があることに注意が必要である。

4.3 成熟度合い（守破離）が異なる寄合と、その関わり方

事前に根回しによって決定された方針が定義され、それに基づいた係の分担がされる。たとえば、「氏子の半纏を用意するのは洗濯屋にお願いできないだろうか」のように係へ依頼する。半纏の係は、半纏について任せ自分の裁量の中で決定し行動する。具体的な中身までは指示されず、不明な手順についておおよそ「今まではこうしていた」という過去の経験や知識に基づいて判断される。

根回しで決定された方針に基づいて、祭礼についての寄合が氏子総代の声かけによって招集される。かつては新しく地域に参加した人は、自らの遠慮によってコントロールされていたが、この寄合は二十年前の事件を教訓により強化されるようになった。

この寄合においては、先ほどの形態の寄合とは趣向が異なり、新しく参加した人からの反対意見は歓迎されない。新参加者の意見は、どんなに正しい場合でも原則として無視される。神輿に詳しい方が新しく参加し、その場を仕切ろうとした事例があったが、彼の意見は誰も聞かなくなり彼は参加しづらくなってしまった。つまり地域社会においても形稽古における「守破離（しゅはり）」に近いパターンが抽出できた。

形稽古（かたげいこ）は、芸道・武道・武術等における形を磨く為の稽古（けいこ）の中に守破離という言葉がある。守＝まずは決められた通りの動き、つまり形を忠実に守り、破＝守で学んだ基本に自分なりの応用を加え、離＝形に囚われない自由な境地に至るというものである【Wikipedia, 形稽古】。つまり形をしっかりと身に付けることではじめて、高度な応用や個性の発揮が可能になるということである。ただし、地域社会においては明確な指導者はいない点は、一般的な芸道や武道とは違う点である。

新しく地域社会に参加した場合、守破離の「守」の段階であるから、できる限り多くの人の意見を聞き、まずはその意見に従って地道に貢献することが求められる。その際、その地域でやり取りされているパターン（型）や共通言語の習得をしながら、その地域への貢献も行う。その後、守破離の「破」の段階に至り自分独自の応用を加え、離の段階で自分のものにしていく。周りのものは、新しい参加者をこのように時間をかけて成長させ、受け入れていく。

★ 共同体における守破離パターン ★

状況

長い地域共同体が過去から永続的に営まれている。その共同体において人の出入りはごく少なかった。

問題

今後も永続的に地域共同体を営むための共通認識を継続させる。

フォース

- その地域になじまない考え方や行動は大切であるが、そのままでは受け入れられないことがある。
- 長い間、地域社会に参加している者は、参加者の家族構成から状況を含めてほぼ全員が共有しているが、新しく参加した人については共有されていない。ただし、長くいれば参加しているだけでなく、共同体への貢献実績によって受け入れられる度合いが左右される。

解決

- 地域社会に新しく参加した人は、まずひたすら周りの人を見て聞いて、その地域に貢献し共通言語を獲得する。この段階にいる人の発言は、原則として聞き入れられない。
- その後、地域社会の全体を見通せ、自分自身の創意工夫ができるようになった頃には、自然と周りの人も発言を受け入れるようになる。
- その参加者の学習と成長は、形稽古における守破離と同様に分類される。

そのコミュニティが過去と未来にわたって永続化され、10年から100年近い単位で代（generation）を引き継いで構築されている。その結果、このような自分たちと異なっている考え方を持っている人や考えを受け入れているのではないだろうか。逆に、米国や新興分野においては、このような長い期間を前提にしたパターンは不適切であったのだろう。米国化した日本では、そのコミュニティや組織の期間を視野に入れ、適切なパターン言語を構築する必要がある。

4.4 場の空気

東洋、特に日本において場の空気が寄合や会議の進行や合意形成に大きな影響を及ぼす。場の空気とは、コミュニケーションの場において、対人関係や社会集団の状況における情緒的關係、力関係、利害関係など言語では明示的に表現されていない、もしくは表現が忌避されている関係性の諸要素のことなどを示す日本語の慣用語である【Wikipedia, 場の空気】とされている。

会議や寄合における汎用的なパターンとして場の空気を扱う。Jim Coplien氏やChristopher Alexander氏が指摘している幾何学的模様（geometry）の役割を場の空気が果たしている。その会議の話題がいかに提起され、話し合われていくのかを場の空気が支配し、場の空気を扱うことによって行われる。空気は、参加者が対話による多重で多様なフィードバックをかけることから生まれる。参加者は、多重なフィードバックによって、コミュニケーションの場における関係性やその背後にある意図を暗黙的に学習する。その背後に感じている関係性や予想される意図が空気の実体である。

空気は自然発生的に生まれてくる。ただし、その寄合や会議の種類によって、生まれる空気も同様に違うものになってくる。根回しをしているときなど信頼が既に構築されている場合は、柔らかくて穏やかな空気が発生する。

もう一方で経験者がその場を支配したい場合は、みんなから意見を集めながら、主として経験者の方向性と違う意見を無視するか、議題を変更する、場の空気に圧力をかけて黙らせるなどの手法がとられる。その場合、全体的な知を集めることはされず、一方的な寄せや会議になってしまう。

★場の空気を作り始めるパターン★

状況

寄せや会議を始める段階で、すでに参加者が打ち解け雑談をしているなど、寄せや会議について熱心ではない日常的な状況である。

問題

参加者たちが真摯に寄せや会議に取り組むようにしたい。

フォース

- 参加者たちは、雑談や日常の事柄に気を取られているが、寄せや会議の空気を作りたい。
- 寄せや会議の空気をいったん引き締め、明確に寄せや会議を始めたい。

解決

「皆さん、お静かに」「開会宣言」「かけ声を掛け合う」などの何らかの儀式を行うことによって、明確に寄せや会議を始める。この儀式は「マイクをセットアップする」などの不明確な場合も可能である。神輿を担ぐときは、静粛にしてから拍子木を打ち、特に「ケ」から「ハレ」への移行を明示する。

★柔らかな空気を作り出すパターン★

状況

- 寄せや会議が開催され最初の段階で、参加者たちは空気を読むために努力している。
- あまり防御的になる必要がない、もしくは、参加者が十分に成熟度合いが高い場合である。

問題

参加者たちに率直な意見に聞いて、様々な人に偏らない空気を作り出したい。

フォース

- 新しく参加した人にとって、参加者が誰が何を考えているかわからない。逆に、昔からの参加者は、新しく参加した人が何を考えているかわからない。
- 新しく参加した人たちをもちりたて、寄せや会議に多様性を生みたいと考えている。

解決

すでに立場がある、もしくは、声の大きい人が主体になって、一人一人にざっくばらんな意見を聞いていく。その結果、参加者がどんな意見を持っているのかが明確になってくる。

ただし、参加者が自分の意見を話した後の、空気を支配している人のリアクションによって結果は異なってくる。多様性を求める参加者にとってのアンチパターンとして、その意見を無視することや、圧を加えて変形してしまうことだ。たとえば、本来の目的探しの為にある「なぜ、なぜ、を五回繰り返すプラクティス」を空気に圧を加える目的に用い、相手が発言しにくくし、多様性を押し込め込む方向になる。

この新しく生み出された状況が、立場によって評価が異なることに注意が必要である。全体としてみると、お互いの空気の押し合いになるため、成功や失敗の判断は保留される。

★空気に流されるパターン／空気に従わせるパターン★

状況

寄せや会議において、新しく参加した。もしくは、参加者が増えた。その方々は、守破離の「守」と見なされる。

問題

新しく参入した人がその組織や共同体に早く馴染み、長い間、共同体と長い付き合いをしたい。

フォース

- 新規参加者は熱意はあるが、何をすべきか全体を見いだすことができない。
- 新規参入者は熱意はあるが、思いついたことを強く主張することは、遠慮の美德から外されると見なされる。
- 既存の参加者は、新規参加者が何を考えているのかわからない。

解決

新規参入者は、まずはその場の空気を読むことから始める。誰がどのような主張をしたいのかを徹底的に理解し、想像することが重要である。例え、意見を求められても多くは語らず、簡単な感想や気づいた重要な点を述べるにとどめる。また、依頼された事項お願いされたことについて、自然体で受け答えするように努力する。

既に共同体に参加している人は、新規参加者のやる気が高いことを理解し、そのやる気（モチベーション）を削がないように配慮が必要である。具体的でわかりやすい指示を出すことによって、そのやる気を有効に活用し、コミュニティにとっても有効な働き手になる。もちろん、その働きについて適切なフィードバック「よくやっているね、ありがとう」を行うことによって仕事の品質向上と、新規参加者のやる気の存続を促す。

このパターンは、期間の短いプロジェクトや企業では有効な場合もあるが、逆に積極性がないと評価される可能性もある。まさしく空気を読んで実施したい。

★空気をふくらませて支配するパターン

状況

寄合や会議、人が集まっている。その場合、意見や成熟度の一致度合いが少ない。

問題

寄合や会議、人が集まる場合において、意見の主体者が意図している結論に持っていきたい。

フォース

- 意見の主体者と賛同者が優位な方向性に結論を導きたいが、それとは違う意見を持っている人がいる。
- 意図している方向の正当性を主張したいが、認められない場合がある。

解決

戦略的に意図している方向に議論を持って行く方法がある。事前に根回しにより賛同者（取り巻き、応援者、followerとも呼ばれる）を得ておく。この賛同者は、ある特定の議題の意見だけでなく、その人に対する信用など全体としての賛同者であることが多い。賛同している人たちは、同じ文化や背景を持ち同じ方向性で語られることが多い。そのため、この事前に根回しについては、意識せずに習慣で行われている場合もある。

寄合や会議など人が集まっているときに、空気には何かの圧力を加え膨らませる。たとえば、原理原則や正論を声を大きく主張し、その賛同者も同様に大声や威圧感を持って煽動活動を行う。発言は、意見の主体者でも賛同者でもよい。水を差された場合でも「前提」と主張したり、無意味に長い発言を行い他の人を混乱させ疲弊させることによって思考を停止させ、再び空気をふくらませ支配させる。

空気に圧力を加え膨らませる方法に、威圧を含めた沈黙も使われる場合がある。実質的な権力者や支配者が発言をさせないような雰囲気作りを行い、暗黙的な結論へ導くこともある。

結果

空気をふくらませ支配するパターンは、全体の状況を把握せずに意図する状況に基づいた原理原則や正論を使うことができるため、非現実的であったりモラルに反する結論に至る可能性がある。

なお、当パターンと次の水を差すパターンは、山本七平／小室直樹著「日本教の社会学」からヒントを得ている。

★水を差すパターン★

状況

寄合や会議の中で空気が作られていくものの、原理主義的な方向になってきている。たとえば、全員が平等に担がなくてはならない、という正論に向けて全員が向いている。

問題

空気が膨らんだ状況になってきたので、現実的な方向に向けて引き戻したい。

フォース

- 原理には基づいているが、現実には即している方向に向かっていない。
- 全体の空気がおかしな方向に進んでいると感じているが、それを具体的に指示する勇気がない。

解決

- 事件が発生したなどの事実を示すことによって、空気を壊し、現実的な解に向けて話を進めることができた。
- 休憩を入れるなどミーティングを中断して、空気を壊し、その休憩時間中に別の根回しを行い、会議再開時に新しい空気を作り出す。納得性を高めるために再開したときにその状況を説明し、再度の意見を求める必要がある。
- 水を差すパターンは、新しく空気を作り出したいチャンスを作り出すときに有用である。しかし、働きは、そのときの空気を壊すだけで、その方向を正しく進める訳ではないので注意が必要である。

共有された場の空気を消滅させるパターン

状況

寄合・会議の開催、神輿を担ぐなど、コミュニティや集団でひとつのことを実施している。

問題

集団でしているひとつのことを解体し、それぞれ個人や日常の生活に戻りたい。

フォース

- 寄合・会議や神輿など、みんなでひとつのことを行ってきたが、一人一人に分解できていない。
- 場の空気が全体の進行や決定を行ってきたが、個人にそれらの責任を移行させたい。

解決

空気を作り出す宣言パターンと同様であるが、違った役割を持つ。明確に空気を切り替えることを宣言する。寄合が終わった後は、一本締めなど「明確に空気を切り替えるパターン」を使い、寄合や神輿などの「ハレ」から、場の空気が日常の状態の「ケ」の状態へ戻す。寄合の空気が亡くなることで、参加者の気分が変わる。その結果、少しの安堵感を感じた後、自分自身の作り出す日常に気持ちを切り替える。

5. 担ぎ手

5.1 担ぎ手の減少

氏子（町会住民）の神輿の担ぎ手は、減少傾向にある。いくつかの理由が考えられるようだ。

世界第二次大戦への政治による神道や宗教の利用、カルト宗教による大事件や反省などから、一般的な人は神

事をさける方向にあった。ここ数年は、テレビ番組や自己啓発イベントによってスピリチュアル・ブームになっている。しかし、その矛先はメディアで取り上げられた地点や事柄に向かっていて、家族や地元を大切にしたり、鎮守の神社には向かわないと実感している。

東京地域以外の地方や地域から東京への人の流入が多く、相対的な人数としての地元民が減ってきている。地方から来た人の多くは、サラリーマンのような仕事をするために東京に来ていることが多く、東京地域の地元へ帰化するために東京に来ている人は少ないようである。さらに、東京に引っ越してきた人が地元行事に参加することは敷居が高いなどの状況がある。東京に引っ越しをしてきても、祭礼や神輿を含む、商店街の餅つき大会のような行事への参加やコミットメントは減っている傾向にある。

祭礼や神輿の主役になる人の弱体化がある。地元で商店を営んでいる商店主とその家族が祭礼の主役になっている。しかしながら、スーパー・マーケットやコンビニエンス・ストアの台頭により、多くの商店では売上げが激減し、昔からの商店は減少し絶滅の危機に瀕している。また、商店主の家族や子供たちも、売上げが激減している商店より、企業に就職する傾向にあり、行事の参加者が全体的に高齢化が進んでいる。地元の行事を主体的に動かす人たちが減っている。

多くの日本人が感じているように価値観が移行している。昔、大切にされた価値観は、悪いことをすると罰が当たる、鎮守の神社仏閣は大切にすると、人と人のつながりやご縁などであった。最近、主流になってきていた価値観は、回帰現象があるものの、直接的・短期的な収入に結びつき、娯楽性が高い、面倒くさくない、などに移行してきている。地元の行事は、現代風の価値観では享受できるメリットが見いだしにくいものであるため、参加人数が減ってきているようである。また、学生にとっても大学受験や留学、就職などで継続的な地元行事への参加が難しくなった。さらに、担ぎ手のプロフェッショナル化と神輿に関する事件の発生によって、地元民であったとしても祭礼や神輿に深入りすることを避ける傾向にある。

5.2 安全と募集のジレンマ

安全性確保と参加者募集のジレンマがある。事件の発生によって、神輿を担ぐためには、あらかじめ許可された半纏を着ることが強化された。その結果、半纏を入手していない地元民が祭礼開催当日に神輿を見て担ぎたいと思っても、半纏がないため神輿を担ぐことができない。その結果、新規に担ごうと思っている人の敷居を高くしてしまった。この半纏については、子供神輿については貸し出しの敷居が低く、この限りではない。

小さい町であり、住んでいる人は数十年にわたって住んでいる人たちであるため、ほとんどの人たちが顔見知りであった。逆に言うと、顔見知りではない人は他の町からやってきたことになる。そのことが危機管理に役に立っていた。見知らぬ人がいれば、声をかけるようにして、この安全性がより強化されてきた。しかしながら、その当

時は大学生や会社員が殺される事件が相次ぎ、見知らぬ人とは関わらないような指導がなされた。そのようにして町の安全性がだんだんと低下してきたのである。

挨拶による安全・安心の拡大パターン

状況

コミュニティや組織が十分に小さいため、地元民の参加者全員の顔を覚えられる規模である。

問題

コミュニティや組織の独自性を確保したい。

フォース

独自性を確保したいが、コストをかけられない。

解決

さわやかに元気に挨拶をする。見知らぬ人でも少しずつ挨拶の環を広げていく。もし危険そうな状況や人であれば、警察に連絡する。

これらによって、地元民の顔を少しずつ覚えていけるようになる。挨拶を続けることによって、その人の体調や変更点に気がつきやすくなる。犯罪行為を未然に防ぐことが期待される。挨拶された側も気に留められているという安心感を得やすくなる。

ただし、人数が増えてきた場合や、人の流入／流出が多い場合、このパターンは有効ではないため、半纏などを使った「印（しるし、タグ、認識票）」が必要になる。

5.3 氏子の参加募集

現時点においては、これらの事情によって、祭礼や神輿に関わる人が少なくなっている。神輿については、神輿同好会の人の助けがなければ、氏子（町会住民）だけでは神輿を担ぐのに十分な人数が集まらない。つまり、神輿同好会の助けがあつて、どうにか十分な人数が集まっている状況である。現時点では、この状況は変わらず祭礼や神輿についての再定義が行われている。祭礼や神輿に関わる地元の人（氏子）を増やすためには、これからの対応が必要である。

氏子の参加については、街角の掲示板に貼付けて祭礼と神輿についての日時案内をしている。また、氏子が神輿を担ぐ場合は、役員共々担ぎやすいようにサポートするように周知徹底している。しかしながら、これらの試みは、今まで一度も神輿を担いだことのない人たちは知らず、成功しているとは言えない。

結局のところ、祭礼や神輿に参加してくれそうな地元民のひとりひとりに声をかけ、口説き落として参加してもらうことが主な方法である。たいていの場合、中身が見えないだけに初めて参加することは勇気があるため躊躇

することが多い。半纏の代理取得や、メンバーへの紹介の挨拶を行うなどの徹底したサポートを行っている。

ひとりひとりへの参加依頼パターン★

状況

祭礼や神輿が行われるものの、参加者が今ひとつである。

問題

問題を起こさない信用できる参加者を増やす。

フォース

- 商店街のお客様など家族を含めて顔見知りになったが、まだ祭礼や神輿には参加していない。
- 祭礼や神輿に参加していないが、そのための時間や体力、家族の理解はある。
- 祭礼や神輿に参加したいが、そのための勇気や関心がない。

解決

可能性のありそうな人に声をかけ、参加を促すようにする。その際、前提や内容を説明し、経験や知識から注意点を事前に教えるなどのサポートする。このパターンは、参加人数を一気に増やすことに向かないが、少しずつ確実な参加者を増やすことができる。

5.4 神輿同好会の参加募集

日程が決定すると、神輿同好会の登録住所宛にお知らせして参加していただく。問題や事件を起こした同好会については案内しないなどの昨年までの実績を判断してから案内を出す。

信用ベースによる新規参加パターン

状況

神輿に新規に同好会が参加したい。もしくは、参加をお願いしたい同好会がある。

問題

トラブルを起こさず、新規に参加してほしい。

フォース

新しく参加している同好会の性格や実績について氏子の役員全員が知らない。

解決

新しく神輿を担ぎたい同好会の場合は、基本的に紹介ベースとなっている。今までの実績がある人から紹介された同好会は、「あの人の紹介だから間違いない」と許可される。一方、実績がない人が同好会を紹介した場合は、残念ながら許可されないようだ。このように新規に参加する場合も、信用ベースでの参入となっている。

このようにして安全と担ぎ手を確保した参加者の募集が行われ、現在のところ無事に祭礼が執り行われている。

半纏による参加者の判別パターン

状況

神輿を複数同好会と氏子により担ぐ（2009年は14団体の神輿同好会）。

問題

複数の団体が参入で、暴力沙汰やトラブルを起こさずに神輿を担ぐ。

フォース

- 同好会の数を増やしたいが、安全も確保したい。
- 安全も確保したいが、同好会の組織員について顔を知らない。
- 誰がどの同好会に所属しているかを知らない。

解決

神輿を担ぐ人は、所属している同好会の半纏を着ることを義務づけた。開始時に、神輿同好会の責任者は、半纏を全員にお披露目して紹介を行う。その半纏を着ている人が暴力沙汰や泥酔などの問題を起こした場合は、その責任者に問い合わせ対応をお願いする体制にした。同好会の責任者にも、会員が問題を起こさないことを含め、当日の運営補助を依頼する。半纏を着ていながら問題を発生すると、自分だけでなくその同好会全体に迷惑がかかることが、安全を担保している。

安全は確保できたが、半纏を持っていない神輿を担ぎたい氏子が気軽に参加できなくなったデメリットが残されている。

6. 神輿

6.1 準備と宮出

神輿は、神輿に親棒（おやぼう）や脇棒（わきぼう）を麻ひもでしっかり締めるなどの準備が行われる。御神霊を神輿に移す神事（御魂入式）が行われる。

毎年、渡御のコースは検討され異なる。図3は、両町会を練り歩く典型的なコースの例である。最近では手配と人員の関係から全部のコースを担ぐことをせず、ひとつの町会を一年ごとに練り歩くことが多い。本来ならば神社から担いで出て（宮出）神社に戻る（宮入）べきであろうが、ひとつの町会だけを練り歩くために事前に別の場所へ神輿を移動し、そこから担ぎ始めることが多い。

宮出（みやだし）は、神輿を神社から出すことである。神輿は馬（うま）と呼ばれる木製の台に乗せられて、担がれるのを待っている。人が三々五々に集まってくる。氏子総代や同好会の方の挨拶が執り行われる。簡単なルールやお約束事の説明がなされる。神輿の馬に拍子木を持つ

た人が乗り、その人の合図とともに肩を入れて担ぎ始める。寄合における場の空気を作り始めるパタンを用いる。神輿の場合は、拍子木や一本締めを使って明確により強くモードを切り替えている。同パタンによって、その場の雰囲気や空気を「ケ」から「ハレ」にがらっと変える。事前に決めた地元のルートを通り歩き始める（渡御、とぎよ）。



図3 典型的なコース例

6.2 神輿を担いで練り歩く（渡御）

白木の入れ物三宝（さんぼう）を持った人が先頭を歩き、通りがかったときに地元の人が紙に包んだお金を三宝に奉納する。なぜか、ここ数年は経験したことがないが、奉納した家の前で「神輿もみ（みこしもみ）」は神輿を左右に揺さぶり盛り上げる。

神輿の周りには担ぎ手と見物者が集まる。子供神輿は軽く一人で持ち上げられるが、今回取り上げている宮神輿はとても重たい。常に担ぎ手がどんどん入れ替わるようにして、元気が回復した担ぎ手を供給するようにしている。神輿の周りに担ぎ手も一緒に練り歩き、頃合いを見て「入る」。だいたい神輿の棒の一番後ろに人が入って一番先頭の人が抜けることが多いようだ。

★担ぎ手のライフサイクル・パタン★

状況

神輿が担がれているとき、神輿の周りに担いでない見学者がいる。神輿を担ぐために必要な人数はそろっている。

問題

神輿を終わりの宮入までコースに従って担ぐ（渡御）。

フォース

- 神輿を担ぐことができる見学者が周りにいるにもかかわらず、担いでいない。

- すでに神輿を担いでいる参加者がいるが、疲れている。
- たとえ、神輿の右前の一部の箇所が下がり水平やリズムを維持できていないなどの状況が不安定であるが、周りの見学者が参加しサポートしていない。
- 状態がダイナミックに変わっているが、担ぎ手の中には特に明確なリーダーや管理者はいない。

解決

- すでに担いでいる参加者が疲れたと感じた場合、担いでいない見学者に声をかけて入れ替わる。
- まだ担いでいない見学者が神輿のある箇所が十分な人数がいなかったと感じた場合、自らの判断に従って担ぐ。

結果

担ぎ手と見学者のライフサイクルが構築された。

担ぎ手のライフサイクルにおいて、担ぎ手は間を見て神輿に入る、神輿の間を読みあわせる、高さを上げたりし、あえて間をずらし作り直す、神輿から抜ける時の間などがある。担ぎ手は、様々な間を支配し、支配されながら担ぐ。これらの間はパタンであり体を通じて学習される。

担ぎ手は、高さやリズムなどの間を読みながら担ぐ。担がれた神輿にリズムがつくと神輿自体の持つ物理的なエネルギーは大きいものになる。その結果、ひとりで独自のリズムを刻む、一人で独自の高さを維持することは困難になり、肩や体へのインパクトが大きい。たまに、ひとりで高い位置に神輿を「上げる」人もいるが、たいてい数秒で他の人の高さに戻ってしまう。リズムが崩れた場合は、担ぎ手の一人もしくは数人が声を上げてリズムや間を整える。たいてい「さー、さー、さー、さー」というかけ声が多いようだ。

時間はバラバラであるが、感覚として三十分弱ぐらいで一度の休憩「おもてなし」が入る。たいてい地元の婦人部が用意するお酒や食べ物が振る舞われる。たいていは地べたに座り歓談している。むろん酒も振る舞われるため、どんどんと盛り上がっていく。

6.3 宮入

だんだん神社に近づいていき、最後は宮入（みやいり）を迎える。ただし、宮入の直前は何度も何度も戻され、より盛り上げることが多い。最後は、馬に乗った人が拍子木で終わりの合図を行う（木を入れる）。

間（リズム）を壊して一体感を高めるパタン

状況

神輿の練り歩き（渡御）が宮入を目前にしている。

解決策

最高に盛り上げて、神輿を宮入させる。

フォース

- 宮入したいが、神輿を終わるのがさびしい。
- 担ぎ手の一体感はあるが、より一体感を増して宮入への欲求を高めたい。

解決

宮入できるように馬の上に拍子木を持って状況を把握している。神輿の棒をおさえて方向や速度をコントロールしている係に指示し神輿を押し戻してリズムを徹底的に壊す。担ぎ手は、それを受けてもう一度かけ声をかけて宮入に向けて進めていく。

拍子木を持った人は、満足するまで何度も何度も押し戻し、その度ごとに担ぎ手は体制を立て直していく。一体感が鍛えられ、より宮入への欲求を上げていく。クライマックスでは拍子木をたたいて、無事に宮入ができた。

神輿で練り歩いた後は一本締め（いよ一つ、シャシャシャン、シャシャシャン、シャシャシャン、シャン）を行う。共有された場の空気を消滅させるボタンと同じ目的を持つボタンであり、「ハレ」から「ケ」に明確に空気を変え、祭りから日常に戻っていく。

7. 考察

今回は、神輿と寄合についての内省やインタビューを通じて観察とボタンへの抽象化を行ってきた。その作業の中で、いくつかの側面において考察を加えたい

7.1 社会的／文化的領域

アレグザンダーは、自立地域 (Independent regions) において「大都市地域は、それぞれが独自の文化を形成するほど小規模かつ自律的でない限り、安定しないだろう [pp.6, ボタン・ランゲージ 環境設計の手引き, アレグザンダー他]」と述べている。地域で自立的に行われている祭りは、地域で実施されている行事のごく一部の側面を切り取っているにすぎない。しかしながら、アレグザンダーの主張する自立地域についてのプラクティカルな実例として考察できるだろう。

東京において、地域に住む他の人と関係を持つことが少なくなったと実感している。スーパーマーケットやコンビニエンス・ストア、大型ショッピング・モールの台頭により現時点で行事の主体となって動いている地元の商店街も収入と数が減ってきているため、地元の発言力や影響力も弱まっている状態である。宮神輿も地元の氏子だけでは既に担ぎきらず、他方からの同好会の方々の協力によって、どうにか成り立っている状態である。他の地域では人が集まらずに、宮神輿は出されずトラックに載せて回っていると聞いたこともある。自立性が減っている地域も多いのではないだろうか。

祭りは、町に住んでいる人たちが集まって自立的に運営を行っているボトムアップ的な行為のひとつであろう。当たり前のことであるが、祭りは法律や行政で規定されているものではない。

もし仮にアレグザンダーの言う自立地域に価値があるのであれば、挨拶による安全・安心の拡大ボタンによって、町のつながりを暗黙的に増やし、ひとりひとりへの参加依頼ボタンや信用ベースによる新規参加ボタンが、自立地域の実現のごく一部に役立つかもしれないと期待している。自立地域の実現には、根本的で有用なボタンと全体の流れを変えるようなプラクティスが必要であるが、その実現如何に関わらず日常生活を豊かにしてくれると信じている。

7.2 組織経営やマネジメント領域

7.2.1 役割の組織と参加の組織

20 世紀は、科学技術と工業化の時代であった。事前に設計したものを同じものを同じように作ることが主流であった。そのためプロセスや規定をドキュメントとして事前に規定化し、それに従うことが求められた。この方法は、原子力発電所や飛行機の製造には有効である。その結果、ステレオタイプの捉え方ではあるが、多くの企業、特に大企業においては、トップダウンの組織とプロセスを作り、役割をベースに業務を行っている。社長や経営陣で決められたことを部門や課に分解して実施することが求められた。定型作業のみで現場に近い下の階層にいる人たちが、未熟（守破離の「守」）である場合は有効なモデルである。

この一般的なトップダウン・モデルに基づいた組織はトレードオフではありながらも、いくつもの決定的な欠陥があった。現場にいる人たちが成熟した場合は、内的動機付けの理由からも適切に組織が働かない。ひとつは横方向の情報伝達や情報共有および意思決定プロセスに存在し、もう一つは領域（業務領域、ドメイン）の分離である。“トップの位置で「事態を読み」、他のみんながこの「大戦略化」の指示にしたがうといったやり方では、もはやどうてい対処不可能なのだ [pp.10-11, 最強の組織、センゲ]。”

一方で、参加をベースにした組織もある。たとえば、最大 10 人程度のダイナミックなチームを作り、ひとかたまりの仕事を行う企業も増えている。たとえば、神輿が町を練り歩いている場にいる人たちを企業や組織の従事者もしくは登録している人と仮定し、担ぎ手をプロジェクトなどひとかたまりの仕事を行う関係者と考え、流動的でダイナミックな人員の配置を行う。担ぎ手のライフサイクル・ボタンの知識がその組織の全体を構成する時のヒントのひとつになる。そのプロジェクトへの参加募集は、ひとりひとりへの参加依頼ボタンや信用ベースによる新規参加ボタンなども参考になろう。

現在、社会の変化は複雑で非連続に変化している。多くの業務において盲目に従うことより主体的に自分で考え行動することに価値が移行している。組織階層をトップダウンでひとりのトップが決めたビジョンを伝達されることによって組織するのではない。完全に個人の願望によって組織するのではない。スキルや個人の特性を大切にし、

集団的に発現したリーダーシップと参加（メンバーシップ）によって組織することを考える時期に来ていると思う。

7.2.2 寄合の特徴と会議

現代の企業や組織では、会議は様々な様式があり、日々発展している。その中で、寄合の 패턴・ランゲージを使用した寄合形式の会議が有用な場合と、他の形式が適切な場合を想定したい。なお、日本における一般的な会議は、賛成／反対 (pros/cons) を決める戦争のメタファで表現される討論形式より寄合形式に近いのではなかろうか。

寄合は、場の空気をコアにしている。場の空気は、その関係性の中で浮き出た場に基づいているため、役割や責任が個人に転嫁されにくい。全体としての責任が共有され分散されるため、個人の精神的な負担が少ないことが多い。逆に個人個人の精神的な負担が少ないが故に、空気が膨らみ、個人の意図とは違う方向に進んだり、急激で大きな方向に進む危険性ははらんでいることは認識すべきである。空気を柔らかくするパターンや空気が膨らんだときは水を差すパターンを参照してほしい。

寄合における決定は、成熟度が高い「大人」であることが求められ評価される。全体の空気を読み現実的な側面も配慮しつつ個人への思いやりを考えて最終的な決定を行う。空気に基づいた決定時も「このようにしたらどうだろう」のように、あくまで質問や確認の形をとることが多い。逆に「このようにすべきだ」と決定した場合は、その発言者に責任が転嫁されやすいからである。

寄合は、じっくり時間をかけて言説（ディスコース）を作り上げられることに向いている。逆に言えば、短期間のプロジェクトや会議では寄合形式が向かないのではなかろうか。ブレイン・ストーミングから WBS (Work Breakdown Structure) に落とししていくような形式は、短時間で行動レベルに落とすことができる。プロジェクトは時間制限があり少しでも時間を短くすべきと考える前提や文化に基づいているが、時間はたっぷりあり急がないことに価値を持つ文化もある。じっくりと納得いくまで共通認識を作り上げたい場合には寄合が向いている。このように継続的に漸進的な成長をしていく過程において寄合は力を発揮する。

実際の会議の形式自体を決定するときに、おしいところを使ったり、場面によって使い分けることが重要であろう。また、現在の認識に基づいて寄合形式の特徴を記述したが、今後は修正しながら整理していきたいと考えている。

7.3 ソフトウェア領域

ソフトウェア開発においても、ヒントになるようなパターンがあると思っている。今回は、ピア・レビューのひとつの形態を紹介する。さらに要求工学やビジネス分析時点における方向性を示す。

7.3.1 寄合型ピア・レビュー

ピア・レビューは、正式なインスペクションをはじめウォークスルーなど、いくつもの手法がある。事前にチェックポイントを明確にリストアップし、それに基づいたピア・レビューは効果を上げている。しかし、複雑で不確定な社会的状況に対応したアジャイル開発プロセスやエゴレス開発においては、発見的な対話をベースにしたレビューがより注目されていくだろう。

寄合型ピア・レビューは、対話による根回しパターンがベースになる。その業務領域や専門知識について詳しくない初心者がいる場合は、共同体における守破離パターンを用い、状況に応じて対話を峻別する。空気に流されるパターン／空気に従わせるパターンを意識することになる。ただし、経験によると専門知識がない場合でも適切な指摘が行われた。

ピア・レビューは、場の空気を作り始めるパターンによって開始し、全体的には柔らかな空気を作り出すパターンによって運用した。場合によっては水を差すパターンによって軌道修正を行う。最後は、共有された場の空気を消滅させるパターンで完了する。

この寄合型ピア・レビューは、ある企業での継続的な 750 を越えるエゴレス開発の案件においても実績がある。その事例でのピア・レビューの終了条件は「相手を思いやり全員が納得すること」とし、全員が力を合わせ、言葉通りの「よりあう」ようにファシリテートした。この寄合型のピア・レビューは、あらゆるアウトプットとステークホルダーが対象で、要件定義／要求開発や仕様策定段階、テスト計画段階、本番移行手続などの対象で、内容と重要度に応じてユーザやマネジメントを含め行った。結果として、顧客満足度向上や工数削減、品質だけでなく教育や属人性排除の点においても高い成果を出すことができた。

寄合型ピア・レビューは、既存のプロセスとは違うため納得性の観点から導入のための説得が難しかった。特にドキュメントよりも人間関係を大切にするため、具体的な手順を記述しにくかった。当初は、正式なインスペクションのサブセットを手順書として用意し、周りの説得を行って導入した。

7.3.2 要求工学やビジネス分析に果たす役割

漸進的な実現プロセスにおいて要求に関しての寄合型ピア・レビューを行っている際に、新しい要求が獲得されたり修正／削除される事例が多かった。要求工学は、要求獲得、要求検証、要求管理、要求分析・仕様化の四つの分野があるといわれている。検証時に新しい要求が獲得されトリアーージ（取捨選択）されることにより、要求検証と要求獲得のプロセスが曖昧になった。アジャイルや PDCA (Plan Do Check Action) サイクルのような循環をなし、漸進的なビジネス成長のコア・エンジンとして、寄合や空気に関するパターン・ランゲージが有用であった。

特に対話による根回しのパターンは、ビジネス分析知識体系や要求工学知識体系を用いた包括性や関係性を導き妥当解を得ることを補助するために有用であろう。勝ち

負けという二者択一の議論ではなく、また否定的な意見を言わないというブレイン・ストーミングと違う。正しく使えば、対立したり矛盾する止揚や中庸を探し出すことに向いている。なお、Richard Nisbett 著 *The Geography of Thought* によると、東アジア地域の文化圏の特徴にある一般的な関係性や包括的に物事を見ることが前提となる。

ただし、本稿にあげたパタン・ランゲージだけでは、要求工学をやビジネス分析を行う現場でのプロセスを満たすためには抽象度が高すぎると考えている。現場をよく見つめた上で、具体的なパタン・ランゲージ発掘や創造が重要である。

7.4 場と関係性と時間のメモ

神輿の担ぎ手は、間（ま）の把握や理解がポイントである。間は、広辞苑第五版から抜粋すると「物と物の間」「リズムを生む為の休拍や句や句の感覚、転じて全体のリズム感」「ほどよい頃合い」「その場の様子」となっている。たとえば、参加している個人が筋肉があるかより、場との関連性に重きを置いている。一方、日本における会議や寄合の参加者は、場の空気がポイントである。場の空気は、コミュニケーションの場における関係性である。いずれも場との関係性を取り扱っている。さらに関係性は静的ではなく動的で時間の概念が欠かせない。場とのダイナミックな関係性が様々な分野の発展により重要なものかもしれない。

間は、物や音など身体に近い場との関係性であり、空気がコミュニケーションなど抽象的な場との関係性である。抽象的な空気は、間の例を体感することで理解を助けられると思っている。今後も研究と考察を進めていきたい。

8. おわりに

今回は、地元で行われている神輿を発端とし、準備段階である寄合、そのコアである空気に関するいくつか

のパタン・ランゲージを抽出した。アイデアの一部ではあるが、簡単な考察を加えた。しかしながら、まだまだスタート地点に立とうとしたところであり、今後の発掘と検証が必要である。

神輿以外でも日常的な生活の片隅に価値あるパタンが潜んでいることを実感し、更なる発掘の必要性を感じている。和の再発見が様々な分野で役に立つことを期待している。

9. ACKNOWLEDGMENTS

今回のきっかけをいただき、相談にのっていただいた羽生田栄一氏に感謝を捧げたい。

「パターンライティングのためのパターンマイニング」で教えてくださった鷺崎弘宜氏と懸田剛氏に感謝している。パタンについて学ぶことができた。

コメントをいただいた野口隆史氏、大槻繁氏、綿引琢磨氏、玉牧陽一氏、梶田英邦氏に感謝したい。

Terunobu 'Terry' FUJINO 氏から本質的で的確なシェフアーディングをしていただいた。多くのことを学んだだけでなく、コメントに感動し心が揺さぶられ涙したことが何度もある。心から感謝している。

二ヶ月に渡って神輿や寄合の話をしてくれた父に感謝している。いつまでも元気でいてほしい。夜な夜なマクドナルドやファミレスに通った私をサポートしてくれた家族に心から感謝している。

最後にあらゆる先人の皆様と、なにより本稿を読んでいるあなたに感謝したい。